

現状と課題

●現状:令和3年度県学調分析より

- ①正答率 ※()内の数字は県平均
 - ・4年 国語 52.5(58.0) 算数 67.6(69.9)
 - ・5年 国語 52.2(56.7) 算数 57.0(61.6)
- ②伸びた児童の割合 ※()内の数字は県平均
 - ・5年 国語 60.5(72.9) 算数 68.1(81.5)

●課題

- ・算数では、上位と下位の二極化が見られる(下位層が多い)
- ・国語、算数ともに記述式に弱く、無答率も高い
- ・学力が低いと学習方略や非認知能力の数値も低い

現状と課題をもとにした仮説

●対象児童に係る仮説

児童一人一人に合った課題を分析したり、スモールステップによる指導をしたりすれば基礎学力の定着を図ることができるだろう。

●学年全体に係る仮説

学習に前向きな学年を作り、教職員、児童がほめ合い、励まし合えば、学習する楽しさを知り、非認知能力を養うことができるだろう。

●学校組織に係る仮説

児童の苦手意識をそのままにせず、定着までの道筋を立て組織的に取り組めば、D小学校の学力向上の手段や方法を確立でき、他校における学力向上策の一助となるだろう。

事業実施報告

- 4月 計画・組織づくり
- 4月～ 少人数・TT授業
- 5月 算数研究授業
- 6月 スクラム事業要請訪問
- 8月 県学調の分析(4～6年)
- 9月～ 個別授業
- 10月～ 研究授業(4年国・5年算)
- 11月 スクラム事業要請訪問
- 12月～ 九九検定

仮説をもとにした取組内容

取組①:基礎学力の定着

●基礎・基本の学習内容の習得

教科書を元にした毎時間の「算数復習プリント」を作成し、授業中や宿題に出して取り組んだ。

●ICT機器や一人一台端末の活用

デジタル教科書、大型黒板による教材提示や発表、分散登校中に「タブレットドリル」などを活用した復習。

●スクラム通信の作成

学年便りの裏面に、算数の単元のポイントなどを記載した「スクラム通信」を作成し、保護者への周知や児童のつまづき解消を狙った。



☆スクラム通信☆

スクラム通信は、児童の学習内容や学習の様子を保護者に伝えるためのツールです。学年便りの裏面に掲載し、保護者への周知や児童のつまづき解消を狙った。

取組②:学習形態の工夫・学習指導員の活用

●4年生・5年生の学習形態「少人数授業」・「TT授業」

算数→4年生4学級の各2学級ごとに、スクラム加配を入れて3分割にした。
5年生4学級にスクラム加配を入れて4分割した。

国語→スクラム加配を入れ、TT授業を行う。

●学習指導員などによる個別授業(毎週火・金曜日)

1年生～6年生を対象に、その子の学力に応じた個別の授業を実施。(学生ボランティアも参加)

●授業補助(1～4年生対象)

学習支援員(会計年度任用職員)を、1～4年生対象に配置し、算数を中心とした授業補助を行った。



取組③:算数科授業改善の取組

●研究授業の実施(1～6年)

●算数教材の環境整備

●指導過程・ノート指導の統一

基礎・基本の定着のため、授業の流れを再確認。
【問題】→【課題】→【見通し】に重点。
県立総合教育センターの資料やD市算数スタンダードの活用。

●算数アンケートの実施:9月(全校児童対象)

学力だけでなく、算数に関する「学びに向かう力、人間性等」も4段階で調査した。



取組④:学習方略や非認知能力の向上

●全校で年間を通じた挨拶運動の実施(全校)

児童や教職員などから“ステキ”な挨拶ができた児童個人を昼の放送で表彰したり、登校班ごと表彰したりして、気持ちのよい学校生活を過ごす風土を醸成した。

●教科による交換授業の推進(高学年を中心に全校で)

「理科・社会」「図工・家庭科」など高学年を中心に交換授業を推し進め、多くの教員の目で児童のよさや頑張り認め、学習への意欲向上を促した。

●学校隣の医療機関へのメッセージ作成(年複数回)

医療従事者への励ましと感謝の気持ちを表したメッセージを各学期に行った。各クラスで模造紙に1文字ずつ作成した。

メッセージ例「〇〇の皆さんの努力が今日の私たちを支えています！」

成果と課題

成果①:対象児童の学力向上(県学調の結果より)

対象児童名	4年生				対象児童名	5年生									
	R3					R2				R3					
	正答率(%)	レベル	正答率(%)	レベル		正答率(%)	レベル	正答率(%)	レベル	正答率(%)	レベル	前年度からの伸び	正答率(%)	レベル	前年度からの伸び
A	50.0	5-A	66.7	5-C	A	42.3	4-C	43.3	3-A	20.0	3-A	-1	56.3	5-A	6
B	7.7	1-C	26.7	2-B	B	65.4	6-C	33.3	3-C	50.0	6-B	1	31.3	4-C	3
C	57.7	6-B	73.3	5-B	C	73.1	6-A	43.3	3-A	26.7	4-B	-7	53.1	5-B	5
D	23.1	3-C	76.7	5-A	D	53.8	5-C	56.7	4-B	40.0	5-B	1	25.0	3-B	-3
E	0.0	1-C	13.3	1-C	E	69.2	6-B	53.3	4-B	43.3	5-A	-2	37.5	4-B	0
F	23.1	3-C	50.0	4-C	F	34.6	3-B	33.3	3-C	16.7	3-B	0	40.6	4-A	5
G	42.3	5-C	66.7	5-C	G	61.5	5-A	50.0	4-C	33.3	5-C	-2	18.8	2-A	-4
H	46.2	5-B	46.7	3-A	H	53.8	5-C	50.0	4-C	33.3	5-C	0	37.5	4-B	1
I	26.9	3-A	50.0	4-C	I	50.0	4-A	46.7	4-C	40.0	5-B	2	50.0	5-B	4
J	46.2	5-B	83.3	6-B	J	30.8	3-C	30.0	2-A	16.7	3-B	1	15.6	2-B	-1
K	50.0	5-A	66.3	4-A	K	84.6	7-A	53.3	4-B	26.7	4-B	-10	28.1	3-A	-2
L	50.0	5-A	56.7	4-B	L	61.5	5-A	43.3	3-A	56.7	6-A	3	53.1	5-B	5
県	58.0	6-A	69.9	5-A	県	62.1	6-B	62.7	5-B	56.7	6-A	1	61.6	6-B	3

考察①:

【4年生 対象児童12名】

- 算数に関しては県の正答率を超えている。
- 国語は県平均を大きく下回っている。内容だけではなく、学習方略や非認知能力の視点から今後も個別の支援が必要である。

【5年生 対象児童12名】

- 算数では多くの対象児童で伸びが見られた。
- 国語、算数ともに伸びが見られる対象児童とそうでない児童の二極化が現れている。重点的な支援の必要がある。

『4年生の緑色』→『県の平均正答率より高い』

『5年生の青色』→『前年度と比べ県平均より伸びた』



成果②:学年全体の学力向上(県学調の結果より)

教科 学年	国語(領域別正答率(%))							
	4年生				5年生			
項目	言語の特徴	情報	話す聞く書く	読む	言語の特徴	情報	話す聞く書く	読む
県	71.6	67.9	29.3	41.1	58.0	60.1	40.6	60.3
本校	65.7	61.0	27.1	33.9	54.1	47.1	37.0	58.6

教科 学年	算数(領域別正答率(%))							
	4年生				5年生			
項目	数と計算	図形	測定	データ	数と計算	図形	測定	データ
県	72.2	58.3	71.6	75.2	65.0	60.4	61.2	56.1
本校	71.1	58.1	65.6	72.3	61.0	56.5	55.5	50.8

考察②:

【4年生全体】

- 学習形態の工夫や学習指導の活用が効果的だった。
- 授業補助により、学習態度が改善された。
- 算数に比べ、国語の正答率が低い。重点的な対策が必要。

【5年生全体】

- 県正答率には届いていないが、来年度以降の伸びが重要。
- 授業は少人数授業は効果的だが、低学年からのつまずきが大きく影響していると思われる。

『黄色』→『正答率の高い方』

成果③:「学習方略」・「非認知能力」の向上(県学調の結果より)

5年生	主体的・対話的で深い学びの実施	学習方略							非認知能力
		柔軟的方略	プランニング方略	作業方略	人的リソース方略	認知的方略	努力調整方略	勤勉性	
R3結果	3.9	3.4	3.3	3.1	2.8	3.7	3.9	3.0(参考値)	
R2→R3変化	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.2	0.0	-0.3(参考値)	
対象児童	3.8	3.5	3.8	3.3	3.0	3.8	4.0	2.9	
対児変化	0.2	0.2	0.5	-0.1	0.4	0.1	0.1	0.0	

※数値の範囲は、【1.0~5.0】 数値が高いほど、よい値

考察③:

【5年生全体】

- 変化のない項目もあったが、向上も見られた。
- 「勤勉性」が減少した。

【対象児童】

- 多くの項目で向上し、改善が見られた。
- 「作業方略」が減少した。

『桃色』→『値が向上した項目』